



進修同窓会 HP にアクセス



土浦中学校第1回卒業生

左後方に写っている少女と母親と思われる女性は、当時珍しかった写真撮影を見学に来たものと思われる(『進修百年』)

## 筑波みやげ 1

土中生たちも、校舎から眺めていたであろう筑波山に、休日には、各々連れ立って山行を試みていました。1900[明治33]年3月発行の『進修第1号』に、刀陽子(理科 岡田毅三郎)先生は、開校2年目の1898[明治31]年の夏休みに、生徒たちと一緒に行った植物採集に係る記事「筑波みやげ」を寄稿しています。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

### 筑波みやげ 刀陽子

「明治三十一年八月、刀陽子暑假中休暇に乘じ、二年生、根本水月、羽生一風、岩瀬竹翠の三生と共に筑波町に遊び、宇東山【現つくば市筑波東山】横山竹次郎氏の宅を借受け、自炊をなして植物採集に従事す。居ること半月、植物採集の傍【かたわら】自宅に山野に幾多の土産を採集せり。植物にあらず、動物にあらず、将た鉱物にもあらず、アアそも如何【何如】なるものなるべき乎、土産の真味を知らず【しらぬ】と欲するものは試みに左の數項を読み給へ。」

刀陽子は、理科岡田毅三郎先生(在職1897「明治30」年〜1899年)。2年生(中1回)根本水月、羽生一風、岩瀬竹翠は、各々、根本亀一郎、羽生英雄、岩瀬茂一と思われま

### 一 刀陽子昼飯に窮す

「刀陽子八月休暇に乘じ、二三の学生と共に自炊をなして、植物採集に従事せんことを約す、早朝自宅を發して筑波町に至り、横山竹次郎氏の宅を借受け、悠然一家の主人公となりしも学生諸子未だ着せず、待つこと數時、鶴首門外に出て【いで】しも亦見えず、時正に二時空腹を感じるに甚だし、旅店【りよてんはたこや。宿屋】に行かんか素志に背く、炊【かし】がなか鍋なく釜なく又飯米なし、居を坐の一隅に占めて惘然【ぼうぜん呆然】自失之を久うす、隣家の横山権平氏、慈善の聞え高し、幸に氏の恵みによりて纔【わずか】に飢を癒すを得たり。」先生は、「大々的の横着もの」と後述しているのとおり、自炊などとても無理で、それをカバーするために生徒を誘ったようです。調理器具や食料も持たずに手ぶらで来たわけですから、先生の「大々

的の横着もの」は本物です。先生が長時間待ち惚けを食らったのも、生徒たちが遅れたのではなく、先生が約束の時刻を間違えて、早く来過ぎたためではないでしょうか。

### 二 二生番頭に簸弄せらる

生徒たちは、到着すると早速、自炊生活の準備を命じられ、水月・一風の二君が、世帯道具の買い出しに出たようです。「水月一風の二生、三丁目【注1】飯田屋に至りて世帯道具を買ふ、曰く「ランプ」曰く播鉢【すりばち】曰く「マツチ」と、番頭其尋常の顧客に非らざるを知り、簸弄【はろうもてあそぶ】一番、曰く謂ふに諸氏研学のために登山せしものならん、曰く「クズ」を取る所の植物を知るか、曰く「アブラ虫」の駆除法を知るか、二生答ふる所なく、蒼皇【そうこう倉皇・蒼惶あわてふためくさま】買物を提げ【さげ】て帰る。」

### 注1)三丁目

3代将軍徳川家光による筑波山諸堂建築に際し、資材運搬用に、北条から神郡を経て、真直ぐに筑波山神社に至る新しい道が造られた。これが、筑波山参詣の「表道」となり、神社下の坂道沿いに約700mにわたって人家ができた。これを距離一丁毎に区切つて、上から一丁目、二丁目、三丁目と呼び、六丁目まである。

筑波山には、魑魅魍魎(ちみもりょう)ばかりではなく、人間界にも物の怪擬き(ものけもとき)の人物がいたようです。飯田屋の番頭は、中学2年生の、13乃至14才の少年には、とても太刀打ちできる御仁ではなかったようです。

「クズ(葛)は、マメ科クズ属のつる性の多年草で、山野に自生しています。根を用いて葛粉や漢方薬が作られ、万葉の昔から「秋の七草」の一つに数えられています。番頭は、「クズ」を「葛粉」の意味で使っているの、生徒たちにとっては余計に分かりにくかったようです。

### 三 水月子経済の名を受く

「水月子、我採集団の新家族に於て、常に財政を司る、器具の買入食料の調達等、総て節儉を努め、殊に買物の懸け引最も巧なり、団中称して経済家と云ふ、東山の児童等水月子を目して曰く『経済サン』『経済サン』と、仮称遂に水月子の本名となる。」

飯田屋の番頭に弄ばれた水月子君でしたが、次第にその隠れた商才を発揮するようになり、飯田屋の番頭とも互角に渡り合うようになったようです。

「経済」という言葉は、「経世済民」の略語として用いられてきましたが、幕末維新期に入ると、古典派経済学における「political economy」の訳語として用いられるようになりました。「経済」の語が使われ出したのは、福沢諭吉が「経済」の語を用いていたことが大きく影響していると考えられ、明治後期には、一般にも広まっていきました。団員たちも、早速、その「経済」を使ったようです。子供たちは、初めて耳にする言葉でしたので、面白がって、「経済」の意味も分からずに、呼び掛けていたのでしょう。

### 四 一風子横山の細君を驚かす

「採集団の組織已に成り、自炊の役割已に定まりしも、炊事を知るもの一人もなし、刀陽子は大々的の横着もの、水月一風二生は各一地方の貴公子にして、炊事の経験なき知るべきのみ。家族三人薪水【しんすい薪を拾い水を汲むこと。広く、炊事・家事】を躬【みづか】らするの「コック」なし、隣家横山の細君に就き二生をして伝習せしむ、一風子一回にして炊事の妙を得、これより決して失敗せることなきのみならず硬軟宜しきを得、庖厨【ほうちゆうくりや。台所】大に美味を加ふ、細君

其機敏に敬服す、是より我採集団全く自炊をなすを得たり。」  
親元を離れて生活すると、氷月君には会計の、一風君には調理の、隠れた才能が見つかりました。刀陽子先生が、こうした才能まで見込んで三君を採集団に誘ったとは考えられません、土中生の多才ぶりが窺えます。

## 五 増塊椀に満つ

「筑波に至るの当初、総て一風子の自宅より寄贈の諸品を以て供給し、庖厨常に余りあり、居ること数日、贈品已に耗【へら】し尽して又余儲【よちよ】余り。蓄え【なし】、商店より取寄せんか、余等始めて【初めて】筑波に遊び未だ市塵【しじん】市中の土けむり。ここでは、この地域の様子【を審【つまびらか】にせず、転々那移【転々と移ること】】数日に亘り、厨【くりや】に一物なく【コソク】大に窮す、刀陽子一計を案じ、門前に戯れる児童に賃して捜査を托す、彼等大に喜び東奔西走直に巨大の南瓜【カボチャ】二を提げて来る、氷月子大に喜び直ちに刀を加へて鍋中に投す【とうす】、烹煮之れを久うす、煮將に成らんとするの此ほひ未だ加醬【かしよ】醬は、ひしお。みその類【せざる】ことを悟る、周章狼狽遂に厨房を探り数匙【すうし】の増塊を投ず、煮已に成る、一同皆喜び近來の珍味ならんと、進んで膳に向ひて各箸を取る、甲曰く増塊、乙曰く増塊と、増塊椀に満ち瓜塊【かいかい】を嚙むこと稀なり。」

筑波の子供たちにとって、町の人(採集団一行)がよほど珍しかったのか、毎日、その様子を見に来ていたのでしょうか。刀陽子先生、その子供たちを「使い走り(つかいばしりつかいばしり)」に使(う)うとは、横着者ならではの才覚です。上手いこと手に入れたカボチャでしたが、氷月君が

煮込み過ぎて、スープ状になってしまい、慌てて加えた、古い味噌の塊は溶けずに残ってしまったようです。でも、当時は、「二汁一菜」が当たり前でしたから、カボチャの味噌スープで、何とか腹は満たせたのだらうと思えます。

## 六 筑波は脚氣の好療地

「三伏鎌金【さんぷくしゃんきん】の候<sup>(注2)</sup>、筑波に到りしに絶えて苦熱煩悶の日なし、実に筑波は避暑の好地なるのみならず這般【しゃはん】これら【の経験によりて、又脚氣の好療地なるを知れり、刀陽子年々歳々脚氣に罹り殆んど【ほとんど】寧歳【ねいさい】安らかな年【なし】、始めて筑波に至る時脚疾身にあり歩行に艱【くるしむ】、居ること数日、医薬を須【またず】病全く癒ゆ、由來筑波の地、水清く気爽かに転地療養の一好地なり。」



東山から見た男体山(左)と女体山(右)

### (注2) 三伏鎌金の候

三伏は、初伏(夏至の後の3番目の庚(かの)の日の日)、中伏(夏至の後の4番目の庚(かの)の日)、末伏(立秋の後の最初の庚(かの)の日)を指し、時候の挨拶で、酷暑の候をいう。鎌金は、「金属を溶かす」という意味で、金属も溶けてしまうような暑さを表している。

脚氣は、ビタミンB1の欠乏により起こり、倦怠感・手足のしびれ・むくみなど

から始まり、末梢神経の麻痺や心臓肥大、浮腫を来し、甚だしい場合には、心不全により死に至ることもあります。

江戸時代、それまで主に玄米を食べていた江戸や大坂の人々に白米食が広まると、脚氣が流行したため、「江戸患い」或いは「大坂腫れ」と呼ばれました。明治に入っても、脚氣の流行は続きました。<sup>1894</sup>「明治27」年の日清戦争では、4万人を超える脚氣患者が出て、死者が4千人近く上り、日露戦争では、25万人もの患者が出て、戦傷病死者4万余人のうち病死者が3万人を占め、病死者の多くは脚氣心(衝心性脚氣。ビタミンB1欠乏症による心不全)によるものだったとされています。パン食が日常の欧米人や麦飯を食べている人には、脚氣は見られないことから、食事に関係しているらしいことは、薄々分かっていたようですが、当時は、戦地に行けば白米が食べられるという貧しい時代で、戦場では、死地に赴かせる兵士に白米を腹いっぱい食べさせたい、という部隊長たちの思いも強かったようです。その後も、その原因が解明されず、結核と並んで、2大国民病と言われるほどでした。

<sup>1911</sup>「明治44」年にビタミンB1が発見され、<sup>1924</sup>「大正13」年には、日本でも、脚氣の主因は、その欠乏であることが公的に認められました。しかし、それでも、年間に1万人前後の人が脚氣で亡くなっていました。これは、白米こそがご馳走という日本の食文化が原因であり、死者<sup>1,000</sup>人を下回ったのは、十分な副食を摂る習慣が広まった<sup>1950</sup>年代でした。

<sup>1898</sup>「明治31」年当時、脚氣の原因は不明でしたから、刀陽子先生も、筑波の水や空気が脚氣に効いたと思ひ込んでいます。が、脚氣が良くなったのは、一風君の家から頂いた玄米あるいは麦飯(田

舎では玄米食や麦飯が普通であった)を食べたことによるのではないのでしょうか。

## 七 土浦の植木屋

「理学士大渡忠太郎氏<sup>(注3)</sup>、嘗て大学にありて未だ学生たりし時、数年間毎年筑波に來りて採集を試みき、里人之を赤門<sup>(注4)</sup>の植木屋と稱し全町殆んど知らざるものなし、一行毎日胴乱<sup>(注5)</sup>を負ひ朝に山に入りて夕に帰る、町内忽ち伝へて曰く東山に土浦の植木屋來れりと。」

<sup>(注3)</sup>大渡忠太郎(1867「慶應3」年〜1953「昭和28」年)植物学者。東京帝国大学植物学科学卒業。同大助手。<sup>1899</sup>「明治32」年に志願兵として入隊したため退官。<sup>1901</sup>「明治34」年、第六高等学校(現岡山大学)教授に就任。中世以来途絶えたといわれていたキクザクラを発見、校庭に植えた。松本高等学校(現信州大学)では第2代校長(在任<sup>1921</sup>「大正10」年〜<sup>1927</sup>「昭和2」年)を務め、同校跡の「あがたの森公園」には、在任中に購入・植栽したヒマラヤスギの大木が残っている。

### (注4) 赤門

東京大学本郷キャンパスの校門の一つ。正門ではない。大学の敷地には、江戸時代加賀藩前田家の屋敷があり、<sup>1827</sup>「文政10」年、將軍家齊の娘が前田家に嫁した際に、上屋敷の御守殿門として建造された。丹で朱塗りされていたことから赤門と呼ばれ、<sup>1877</sup>「明治10」年に、東京大学に移管される。<sup>1931</sup>「昭和6」年に旧国宝に指定された(現在は重要文化財)。

### (注5) 胴乱

採集した植物を入れて持ち歩く円筒状の容器。

当時、「植物学(者)」や「植物採集」などの言葉を知っていたのは、学生や知識人のみでした。植木屋は、作庭用の草木を山中へ入って探すこともありました。それで、植物採集をしている人たちも同じようなことをしていると思ひ、「植木屋」と呼んだのでしょうか。それにしても、植物採集ぐらいで、たちまち地域の評判になるとは、実にのどかな集落です。